

## 恵みに生かされるわたし

「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」、キリスト・イエスはそのようにわたしたちを招かれます。ローズンゲン、日々の聖句の 2021 年の年間聖句はそのように主の御言葉を取り次ぎ、わたしたちの日常の中に神の言葉を置いて、そこであなたは恵みに出会うであろうと告げています。ローズンゲンはドイツのヘルンフト兄弟団が発行するもので、2021 年度で第 291 版を数えています。今年年間聖句に選ばれたのは、ルカによる福音書 6 章 36 節の御言葉でした。序文に、この御言葉の解説がありましたので、まずそれを紹介しましょう。

「神は無条件に憐れみ深い方です。時々憐れみ深いとか、わたしたちがお願いするときだけ憐れみ深いではありません。神は常に憐れみ深いのです。それは神の属性なのです。イエスはわたしたちに真似るよう促しておられます。けれども、どのくらいうまくいっているのでしょうか。わたしたちは毎日あらたに学ばなくてはならないのです。

聖書が「憐れみ」と呼ぶ事柄を、ただひとつの言葉で言い換えることは簡単ではありません。それは、中近東で家長が友人たちから知らない人たちまで、その家に招き入れるような寛大なやり方です。そのように、聖書は神について書いています。おそらくよく知られている詩篇 23 篇の最後の行から理解できるかもしれません。「良いことと慈しみは、わたしの一生を通じて、わたしを追ってくる。だからわたしは主の家にいつまでも留まろう。」この慈しみをわたしたちはそっくりそのまま信頼して要求してよいのです。この慈しみは、わたしたちに毎日、繰り返し学ぶよう機会を与えてくれます。「日々の聖句」は一年を

通してそのことへ、わたしたちを招いています。新しい年は未踏の道のようなものです。けれども神は、御言葉と、祝福と、大いなる慈しみをもって、わたしたちと一緒に歩んでくださいます。」

こういう文章ですね。そこでもう一度、主の招きの言葉を、わたしたちのなかに投げこみます。

「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」

これはわたしの印象ですが、マジメな人ほど、この聖句を「命令」として聴き取るのではないかと思います。違います。最初に聴き取るべきことは「あなたがたの父は憐れみ深いように」です。ここがすべての鍵です。しかし、わたしたちが日常生活の中でまず出会うのは不意打ちのように訪れる苦難であったり、悲しみであったり、人と人との出会いがしらの衝突のようなアクシデント、今日という一日に何が待ち受けているかはじめから分かっていたなら、もう少しちゃんと備えて立ち回れるだろうに、実際にはそういうことはなくて、現実には振り回されて我に返る時間というのは一日の終わりか、あるいは意識的に事柄から身を引いて、待てよ、神はどこにおられ、この背後に何を示しておられるかと立ち止まるか、あるいは、主よ、助けてください、僕は溺れそうです、とペテロのように叫ぶかでしょう。ローズンゲン、「日々の聖句」はある意味、そういう事態を想定していて用い方として、まず朝読み、これが今日、わたしに与えられた御言葉であると確認して祈り、ポケットに突っ込んでおいて、昼の弁当休みの合間にまた取り出して読み、最後に寝る前に一日を振り返って、主の前に置く。御言葉を通して対話

する。つねにわたしの人生に、主がおられることを確認して生きるように求めています。けれども仮にこういう習慣を身につけたとしても、脊髄反射的に、わたしたちは攻撃されればやり返しますし、叩かれれば殴り返し、蹴り飛ばすくらいのことはするものです。ここで人間の知恵に目を配りますと、最古の法律とよばれるハンムラビ法典のなかにある「目には目を、歯には歯を」と呼ばれる復讐刑法の本当の意味は、やりかえしてもよいではありません。そうではなくやり返すにしてもやりすぎるな、目に対しては目しか要求してはならない。目の対価に目と歯を失わせるようなことをしてはならない、と戒めることによって抑止力を持たせる狙いがあります。それほど人間の感情を制御することは難しい。とくに怒りや憎しみなど負の感情をコントロールすることは難しいのです。だから、わたしたちは御言葉に語られる順序のように、自分を中心にして発想することから自由でなくてはなりません。「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」というキリスト・イエスのお言葉は、まず、あなたは憐れみ深くあれ、と言っているのではないのです。そうではなく、「あなたがたの父が憐れみ深い」こと、つまり、あなた自身が、父なる神の憐れみが必要な存在であること、つまり罪びとであること、そして、実際に、あなたには十分な憐れみが与えられていることに気づくように求めています。この場合の憐れみは、恵みでも、慈しみでもよいし、配慮でもよい。神さまがあなたにどれほどのことをして下さったのか、そのことを、キリスト・イエスが語られた、ということを受け止めるように求めておられます。わたしたちのために飼いや葉桶に生まれ、貧しさ、病、人々の無理解、敵意、裏切りを味わって、十字架でさらし者の死を遂げられた方、自分を嘲る者のとりなしをして死なれた方、そしてよみが

えられた方、復活して弟子たちの前に姿を現された時も、ひと  
言も恨み言を述べず、かえって弟子たちの平安を願われた方、  
こうして赦しを生きることがどういうことを示された方が語  
られたお言葉なのです。弟子たちは愛されたからこそ、やり直  
すことができ、赦されたからこそ、赦しを生きることによって神の愛  
を示すことを求められました。「あなたがたの父が憐れみ深いよ  
うに、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」という御言葉  
は、そこにわたしたちを立たせるのです。神さまにおいては、  
憐れみが処罰に先立ち、律法に福音が先立っている。赦しが先行  
し、わたしたちの応答が待たれているのです。それがキリスト・  
イエスの十字架の御生涯に示されている。この方が、わたしの  
救い主なのです。だから、まずわたし自身が憐れみ深いかどうか、  
ここまでは我慢できるが、もうわたしの限界を超えたという発  
想から始めてしまうのではなく、今、この瞬間も神が憐れみ深い  
方として、忍耐強く、わたしたちに臨んでおられ、そのことは  
キリスト・イエスのゆえに疑いなく存在する神の真実であるこ  
とを出発点とするのです。これが第一。それから二番目に大事  
なことは、「あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」という  
のは、「命令」ではなく「招き」なのです。神の願いと言っても  
よい。十字架につけられた方が、このお言葉をもって、あなた  
も自分自身の十字架を負ってわたしに従いなさい、と仰ってお  
られる。そのような招きです。少し注意深く前後を読んでもみま  
すと、この「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがた  
も憐れみ深い者となりなさい。」という言葉は、新共同訳聖書で  
は、「敵を愛しなさい」という小見出しのついた文章のまとめの  
聖句です。そして次の単元は「人を裁いてはならない」と続く  
のです。つまり、この「あなたがたの父が憐れみ深いように、  
あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」という御言葉は、エ

ベレストのような山の頂きであって、右側のすそ野が「敵を愛しなさい、敵のために祈りなさい」、左側のすそ野が「人を裁いてはならない、あなたがたも裁かれないように」という招きになっていることに気づかされます。この招きは、神さまご自身が常に憐れみ深く、善人にも悪人にも分け隔てなく太陽を昇らせるように、あまねく慈しみ深いことをあげ、その恵み深さに、わたしたちを招いてくださることによって、人を裁き、敵を作り出し、憎んで、排除していくこの世の仕組みから、わたしたちを解き放とうとしておられることが分かります。わたしたちはキリスト・イエスの和解の福音に与るように招かれており、キリストの十字架の精神を生きるように願われているのです。こうして、この一年、2021年は、神が「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」と語られたことによって、わたしたちが怒り、顔を背ける地点において、主イエス・キリストが傍らに立ち、赦しを与えられた方であることを示します。「わたしが求めるのは憐みであって、いけにえではない」とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである、という御言葉もあります。わたしたちは正しい者ではありません。わたしたちは人を裁くことによって自分の正しさを示すことしかできないからです。五十歩百歩の存在でしかない。しかし、ただ一人の正しいお方、良いお方が、それでもわたしたちを裁かずに、この招きの御言葉をもって、わたしたちの歩みを照らしておられるのです。このことを覚えて、つねに御言葉の許に立ち帰り、十字架の主を仰ぎながら、わたしたちのこの年の歩みを進めてまいりましょう。

お祈りいたします。